岐阜県中学校
国語教育研究会

会報 No.3

ある文章 …… 伊藤和夫 (1)

助動詞「まい」
　取扱上の一考察 …… 北川一郎 (2)

国語科プログラム学習 …… 宮部芳朗 (3)

事務局だより …… (6)

会計報告 …… (7)

１９６２，９，１３

ある文章

岐阜市立梅林中学校　浅野和夫

昨年の春から初夏にかけて、中学校の新しい国語の教科書、各学年とも十六部ずつ読むように強制され、往生したことがあった。およそ二ヶ月間というもの、週刊誌や碁の本もいっさいおあずけ、時には新聞さえ――それほど活字の悪魔からのがれたいという気持に駆られてしまっていた。

近頃、メガネの必要（内容極秘）を感じてくると、妙なもので、9ポ以下の活字は、ほとんど頭に残らず、教科書ぐらいの活字で書いたものでなくては、記憶に残らなくなってしまった。だから、あれほどいやいや読んだ教科書の文章でありながら、時々ふと頭に浮かんでくるのは、その中に書いてあった文章であることが多い。

ある教科書に、有名な科学者の一文が教材として載せてあった。次はその一節である。

「人間の種族の間にも、生存競争が昔から激しく行なわれてきた。――武器を取る戦争ばかりでなく、商業上の競争とか、技術や学問の上の競争とか、いろいろ行なわれている。このような競争は、何かしらおたがいの進歩を促すためのよい薬になるのであって、それがまるでなくては、人間はどこまでも進歩発達していくことができなくなってしまうだろう。」

文章の前後を切り捨てて、その一部だけをクローズアップし、それをあげつらうのは、正しい批評の態度ではないが、この一節の前後には、ここに書いてあることを、筆者は否定していないので、ここに書いてあることが一応筆者の考えとみてさしつかえないようである。

このごろはやりの、「プログラム学習」を展開しようとしている方々に、一つこの段落の「プログラミング」を考えていたゞきたい。

「武器を取る戦争ばかりでなく」と言えば、「武器を取る戦争」は、その他の戦争と同列に考えても良いわけですね。そうすると、「武器を取る戦争」も、「おたがいの進歩を促すためのよい薬になり、」「それがなくては、人間はねどこまでも進歩発達していくことができなくなってしまう。」のですね。

待てよ。あまり精細なステップは作らないでほしいものだ。あまり文章を分析することは、考えものだ。筆者の意見にのまれてしまって、うっかり「戦争は必要だ」などと思い込んでくれたならば、それこそ人間の破滅だ。憲法第九条がどんな顔をするだろう。

それにしても、よくもG項とやらの検閲がパスしたものだ。あまり深刻な生活作文はいけないとか、社会改造の考え方が急激すぎるとか、いろいろ批判はするものの、戦争肯定の思想とはかりにかけたならば、ほとんど問題にはならないと思うのだが、どうだろう。

このごろ、教科書の文章が、おとなしくなったと人は言う。妙な修身風が感じられるともいう。が、案外かくれたところに、われわれとしては許せない文章の

あることも目を注ぐ必要はないだろうか。

（梅林中）

―1962・9・5―

助動詞「まい」取扱上の一考察

稲葉郡稲羽中学校教諭　北川一郎

一、教科書に現れている助動詞「まい」の指導系統を考えてみる。

○小学校

一年
二年
三年
四年
五年　げき㈠古ぐつホテル（東書）
　　見つからぬ

旅人「それではここで別れるよりほかはあるまい。」①（二月）

六年　「わらい」（東書）

㈠盆山（狂言）

「やるまいぞ、やるまいぞ。」②（三月）　注「古いことばづかい」

㈡むかしのわらい話（星とり）

「そこからは届くまい。」③

○中学校

一年　文章のうつりかわり（光村新）

㈢こんぺいたう（狂言）

「一度つかんだら放すまいと……」④（九月）

二年○ことばを生かして　（光村新）

㈠素通りすることば（社説）

反省を怠ってはなるまい。⑤（四月）

○書く心構え

㈢大きなことばと小さなことば（随筆）

そんなところにひそんでいるのではあるまいか。⑥（七月）（推量の助動詞）

○古典に触れて

㈣清水（狂言）

「この太郎冠者はまたとふたりはござるまい。」⑦（十月）

（文法の研究）

「まい」（十月）ここで推量の助動詞としてまとめる。

○主題をめぐって

㈡歩きながら考える（論説）

気を配っているということでなくてはなる

まい。⑧（十二月）

三年　○文学のおもしろさ（評価）

㈢文学のおもしろさ

やむを得ぬところとせねばなるまい。⑨（六月）

（ことばの研究）

「まい」ここで意志の否定としてまとめる。⑩（六月）

○意見を明確に

㈡人間らしさということ　（随筆）

威厳だけはくずすまい。⑪（九月）

○表現を生かして

㈡仏陀と孫悟空　（戯曲）

あなたはあすこまで行けますまい。⑫（一月）

○論理的な叙述を

㈠去る者残る者のために　（論説）

心構えがなくてはなるまい。⑬（一月）

「どんな意味か」で既習事項と関連してまとめる。

二、右の例文によってわからせたいこと。

1．それぞれの意味の微妙なちがい。

2．主としてどんな文種に頻出しているか。

論説	4
狂言	3
戯曲	2
随筆	2
昔の笑い話	1

3．助詞、助動詞との接続のしかた。

4．この「まい」は、生徒作文にはいっこうに使われていない。これはもっとわかりやすい「ないだろう」の形の勢力が強くなって、これを圧倒してしまったのであろう。

5．「まい」の古い形は「まじ」であり、打消を含めた推量や意志を表すほかに「すべきでない」「……してはならぬ」（当然）「……するな」（禁止）などの意を表す。

例

冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ　（徒然草）

国語科とプログラム学習

宮部芳朗

わたしたちは、日々の一斉授業を通して、みんなの生徒が学習に興味をもつ生き生きした授業、生徒がどしどし発言し積極的に学習に参加する教室を夢に描き、主体的に学習させるにはどうしたらよいかという問題をいろいろ考えてきた。

けれどもわたしなどは、その期待をうらぎられ、指導

のまずさをつくづく感じさせられることがしばしばであった。一人でも夛くの生徒を活動させるための名人芸が教師に要求されているのに、実際はクラスの十人ないし十五人が活動すれば上々といったことも夛かった。残りの四分の三の生徒はあまり学習に参加していないことを見過ごしてきたのではないかと思う。そしてテストの結果をみては、「わかっていると思ったのに、何を学習していたのだろう。頭の悪い生徒たち」と嘆いてきた。四分の三の生徒は学習に参加していなかったのである。学習が一人一人に成立していなかったのである。

また授業をうまくやることは常に考えてきた教師が、生徒が学習するとはどういうことなのかをつい見落としてはいなかっただろうか。指導案には熱心であったが、生徒のする学習の本質は忘れがちであったともいえる。こうして一斉授業だけをつづける限り、個々に学習が成立しないということから、学習の個別化ということが問題になりだした。たまたま国立教育研究所の矢口先生などの話を聞くに及んで、プログラム学習の原理に驚嘆させられ、夛人数の生徒の学習効果を高めるためにも、学習の個別化ということにすすんでいった。

一、プログラム学習の原理

学習指導の本質改善といわれる学習の原則（そのままプログラム学習の原理）を略記する。

1．生徒の主体性によって学習は成立する。

教師が行うものではない。生徒の主体的な行動を通して（なしたことに応じて）学習は成立するものである。

2．学習は生徒の個々に成立するものである。

一斉学習では不可能に近い。一人一人がなにをなしたかに応じて、一人一人の中にこそ、学習は成立する。したがって、一人一人が学習するようにコントロールする必要がある。

3．学習の本質はフィード・バックにある。

生徒に必要な食物を生徒にすぐにバックしてやることである。一斉授業では一部の生徒にしかフィード・バックされない。短時間に自動的にバックされることが必要で有り、ここにおいて学習と評価は一体であるという理想が達せられる。

4．学習はスモール・ステップで行われなければならない。

生徒の実態、生徒の思考過程に応じて、論理的に組まれたスモール・ステップを通過することによって、目標値に達することができる。これは学習の本質にたっての問題であり、一斉学習ではなかなかえられないものである。

二、国語科とプログラム学習

国語科はいろいろな言語活動の場であり、文章はまた夛くの複雑な要素の統一体である。この国語科でペーパーによるプログラム学習は果して可能であろうか、文章読解の過程で、目標値をどこにおいたらよいか。数学などとちがい、

文章の複雑性は論理をふまえてのステップ構成にたえるだろうか。読解におけるステージはどう設定したらよいのか。文学の鑑賞などでもプログラム化できるかなど、いろいろな疑念をかかえながらも、プログラム学習の原理を生かし、一斉指導の弊を少なくしたい。とにかくできるところから手をつけることだ。成すことによって学ぼうということで、原理の研究、プログラムの作製、実践へと、共同研究にすすんだ。次に国語のプログラムの現状から二、三の問題を記してみよう。

1　現状では一文よみにはじまる文中心のプログラムが多く発表されている。

文章の論理をおさえてステップを構成する必要から、現在では主に、評論、説明文などの論理的文章について試みられている。そしてこの文章は何をいいたいのかという筆者の意図を読み取るため、一文一文をおさえ、文と文の関係、段落、文章の構造、筆者の意図へ高める方法が多くとられている。これはプログラム学習の原理から当然なことであるが、複雑な要素の統一体である文章を読解する目標値やコースアウトライン・ステージの設定、ステップを非連続の連続に構成する技術など、なかなかむずかしい問題がある。特に文章の複雑性の中で、どの面に目標をしぼって、目標ステージを決めたらよいか。文章全体をふまえた有効なステップは組めないものだろうかなどがある。

2　国語学習の要素としての漢字とか特に文法、それに思考スキルとしての読解スキル・作文スキルなどにプログラム学習が有効であるといわれている。

自主性、スモールステップ、連続性、フィードバックなどの原理が正しく適用されれば、国語科にとって効果があり、特に生徒の国語学習の実態は零点からいっきょに百点にゆくものではなく、そこにたくさんの段階が見出されるので、スモール・ステップの原理は特に有効と思われると興水先生はいっておられる。そして興水先生は二十の読解スキルを挙げておられる。国語の要素をふくめた広義のスキル面のプログラム化の研究もなされなければならない。

3　プログラムの原理やその精神を現在の国語の授業に生かすことを考えたい。

従来の一斉指導一本槍からすすんで個別指導のできるところから個別化をくふうしたい。このため、イ生徒がうけとめたことを表現する（書く・話す）

機会を多くする。（主体性）

ロ表現したもの（反応）をたしかめ合う場をたいせつにする。このためグループなどを生かすこともくふうしたい。（フィードバック）

ハできるだけ個別学習をする時間をとるようにする。（個々）

ニ生徒の実態や思考過程を分析し、きめのこまかい指導を考える。この場合特にわかりやすい発問のしかたをくふうすると共に、生徒に次の学習が予想されるような連続性を考慮する。（ス

テップ）

３はプログラム学習とはいえない。結局はプログラムの作製、実践へゆきつかなければならないものである。そしてプログラム学習をすすめることによって、生徒の実態やつまずきが明らかになり、教材研究特に文章構造や指導事項がはっきりしてきて、一斉指導にも貢献することはまちがいないと思う。

（加納中）

事務局より

私たちの悩みをざっくばらんに語り合い、それを自分たちで解決していけるような会はできないものだろうか。会費を持ち寄って、自由に気楽に話し合い、お互いに自己を高めていくような会は作れないものだろうか。等の私たちの切なる願いをこめて発足した岐阜県中学校国語教育研究会。この私たちの会も今月で、すでに九ヶ月たち、その間、徐々にではありますが、会員数三〇六名（会費未納者八九名）を数えるにいたりました。

九ヶ月といえば、さしずめ赤ん坊なら、どこそこの見さかいなくはいまわる時期で、「いつになると、立って歩くのだろうか。」と大いに期待されるはずです。岐中国研も、会員の方々から「それやれそれやれ。」と激励のことばをいただき、声援しきりというところなんですが、期待されながらも、赤ん坊のように、はいまわっているような状態です。

さて、誕生して間もないこの会の遅々とした歩みを拾ってみますと、次のようです。

一月十八日　設立（総会、研究授業と研究会）

二月十七日　第一回理事会

五月十二日　第二回理事会

六月二十日　第三回理事会

これらの会はすべて、従来の岐阜県中学校国語研究会との関連をどうさせるか。研究課題をどこにおこうか。やれ、支部活動は？　経費はどうしよう。機関紙（誌）の発行をどうするか。とか。生まれ出るものの悩みと言いますか、いろいろの難問題の処理、対策に大半をついやしてしまいました。その反面、意欲的な事業計画も、討議の材料になりました。いずれにしてもはいまわっている状態を抜け出していません。ほんとうにいつの日にか、目標を見つけ、ひとり歩きできるようになれるだろうか。みなさま方の適切なご助言をお待ちしています。

なお、今年度の事業計画として、漢字学習書の作製に着手いたしました。この事業については、第三回理事会の折、県下中学校へのアンケートの結果、賛成の声が大きかったらということでお認めを願ったわけでありましたが、アンケート利結果賛成の声多数でありましたので、六月二十八日以降、七回の会合をもち、その編集のために、準備を進めています。

（千種　記）

会計報告（９月現在）

収入		支出	
借入金	１０，０００	設立のための会場費等	１，２００
会　費	２１，７００	連絡文書印刷代	２，４５５
寄付金	２，７００	連絡文書通信費	６，３００
雑収入	１２	栞，会誌印刷費	８，２５０
		故河田校長香奠花	１，７００
		用紙代	１，７１０
計	３４，４１２	会則印刷代	１，０００
		事務局費（印鑑）	２６０
		計	２５，７０５

岐阜市立加納中学校研究発表会

期日　十一月十九日（月）　九・三〇―三・三〇

題目　中学校の学習指導

――学習の個別化をめざして――

発表　全教科

講演　プログラム学習について

国立教育研究所　矢口　新　先生

昭和三十七年九月十三日

岐阜県中学校国語教育研究会

（岐阜市本荘中学校内　電話２―３４５０）